の管理する実習室及び、メディアゾーン、オープンフロアに設置されているコンピュータ全てに導入されており、教員、学生の誰もが自由に使用できます（ファイルの格納場所は、スタートメニュー→全てのプログラム→ESP）。[9] 時間のある時に一度試してみてはいかがでしょうか。

5．むすび

ボーダレス時代に生きる皆さんにとって英語との付き合いが今後益々深まっていく可能性は非常に高いと思われます。授業で教員から「教えてもらう」以外に、様々な方法を使って「自ら学びとっていく」過程で、自分自身にとって居心地のいい学習環境と学習スタイルを見つけることができれば、もっと自律的でそして楽しく前向きに英語と関わることができ、EGP や ESP という枠組みにとらわれない、本当に自分が必要とする英語力を無駄なく習得することが可能であろうと思われます。そのためにも、この機会に自分が英語を学ぶ目的、ひいては自分の将来について、少し立ち止まって考えてみませんか。(次号へ続く)

参考文献・注

1）竹蓋幸生・水光雅則（編）(2005).『これからの大学英語教育』岩波書店, 10-11.

2）文部科学省が2003年に発表した「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」においても「英語力の指標」に TOEIC（Test of English for International Communication）が使われている。詳しくは http://www.mext.go.jp/

3）TOEIC の運営・実施は、財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会による。
http://www.toeic.or.jp/philosophy/philosophy_01.html?eno=1153

4）http://www.toeic.or.jp/sys/letter/NewsNR2010L_8682.pdf

5）Panasonic 以外にも、商社、食品、輸送用機器、機械などの TOEIC 導入活用例が紹介されている。
http://www.toeic.or.jp/corpo/archive/case01/case_t_05/

6）制作者：アルク教育社
http://www.alc-education.co.jp/academic/net/index.html

7）制作者：波多野電気
http://www.hatano-denki.com/

8）制作者：波多野電気
http://www.hatano-denki.com/

9）利用法等の質問は名古屋情報メディアセンターにてサポートを行っている。

二条城のソテツの木

経営学部
島田　了

二条城は、金閣寺や清水寺と並んで、誰もが知っている京都の名所である。旅行や用事で京都を訪れる人の多くが立ち寄る場所であろう。何しろ便利である、金閣寺のように街の北のはずれにあるのでもないし、清水寺のように延々と急な坂を登る必要もない。二条城前という名前の地下鉄の駅を降りる（昇る？）とすぐ目の前だから、便利なことこの上ない。そして見どころは十分にある、しかもわかりやすい。徳川の権威をこれでもかこれでもかと見せつけるための豪華な御殿である。入口からして派手な唐門である。また狩野探幽、その弟尚信ら狩野派の絵で装飾された大広間、書院など華麗な室内装飾も見事である。京都のなかでもこれほどわかりやすい名所も少ないのではないか。

見事なのは建物だけでない、その庭園を忘れてはならない。現在の二条城には、二の丸庭園、本丸庭園、そして清流園の三つの庭園があるが、このうち現在の本丸庭園は明治になってからのもので洋風の影響を受けた庭園であり、清流園は昭和

二条城二の丸庭園

40年（1965)、戦後になって完成した和洋折衷庭園である。当初の形を残しているのは二の丸庭園で、これは慶長７年（1602）から８年（1603）頃に二条城造営に合わせて作庭されたものが、寛永３年（1626）後水尾天皇の御幸を仰ぐための御幸御殿の造営にあわせて一部改修されたものだという。桃山様式の池泉回遊式庭園で小堀遠州の代表作として知られる有名なものである。

細かい庭のつくりをどうこう言うつもりはない、ただ問題としたいのは、この二の丸庭園を見たときの印象なのだ。特に気になったのは、庭の目立つところにあった大きなソテツの木である。日本庭園の真ん中に異国風のソテツの木がでんと植わっていた。私はそこになんとなく違和感を感じたのだった。

二の丸庭園のソテツは、当時佐賀藩主鍋島勝重から献上されたものであるという。九州からの献上品であり、南国の産であるソテツを庭に配することにより、徳川の支配が九州にまで及んだことを象徴するものであるという指摘もある。最近の調査では、徳川吉宗時代の二の丸庭園の絵図から当時15本ものソテツが植わっていたことも明らかになった。ソテツは、私の違和感に反して、確かに二の丸庭園にとって重要な要素だったのである。

またしばらくして京都伏見にある醍醐寺三宝院を訪ねたときに、表書院の下段の襖絵に孔雀とソテツが描かれていたのを見つけた。そして三宝院の庭にもソテツが配されていたのである。今日伝わる醍醐寺三宝院の庭は、もともと豊臣秀吉がの有名な醍醐の花見（慶長３年、1598）にさいして、みずから基本設計を行ったものであるが、完成を見ることなく秀吉は死去、その後住職の義演が造営を続け、一流の作庭家を迎えて元和10年(1624）までの27年もの歳月をかけて完成されたものであるという。

醍醐寺三宝院の作庭家の中に「天下一の石組みの名手」とされた賢庭という人物がいた。賢庭は二条城二の丸庭園の作庭を造営奉行小堀遠州のもとで行なった庭師でもあり、この二つの庭のソテツの木にはなんらかの関連があると考えられる。

義演がその造営の過程を詳しく記録した日記(『義演准后日記』 醍醐寺三宝院所蔵　62冊、1596～1626）が残されていて、その中にソテツの記録がみられるというが、これはなんとソテツについて日本で三番目となる記録だそうである。ソテツに関する最初の記録は、1577年に京都に宣教師が建てた教会を描いた『扇面南蛮寺図』（狩野宗秀、神戸市立博物館所蔵）に描かれているもので、次は秀吉の聚楽第を描いた『聚楽第図屏風』(三井記念美術館所蔵）だそうである。そうだとすれば、ソテツが意味するものは、単に九州支配の象徴ではなく、南蛮文化という日本人が出会うまったく新しい文化の象徴であり、さらにその背後にある広い世界をも意味するものであろう。それを大胆にも日本文化の中心ともいえる日本庭園に持ち込んだということになる。

醍醐寺三宝院の庭園では、政治的な意図をはるかに超えた、進取の気風と大胆な構想力をそこに見ることができよう。作庭上の効果から日本庭園であっても、新しいものを効果的に取り込もうとする意欲がそこにはある。

江戸作事奉行として活躍した小堀遠州は当時まれにみる多彩な才能を示した人である。建築家として、作庭家として、そして茶人としても日本文化史上に大きな影響を残した人物である。そして彼は、当時の西洋文化についても詳しく知る人物であったという指摘もある。後陽成天皇の命により「宮廷付工人」として宣教師からヨーロッパの技術を学んだというのだ。遠州の庭にはソテツだ

けでなく、さまざまなヨーロッパの技術に学んだ形跡がみられるともいう。

日本文化の粋といわれるものが、当時の日本人にとってまったく異質で新鮮であった西欧文化技術の吸収によって生み出されているわけである。すぐれた文化というものは、いつでも異質な文化との交流によって生まれるものなのであろう。

随心院の庭に咲くノウゼンカズラ

さて、醍醐寺から少し離れたところに随心院という小野小町ゆかりの寺がある。ここも例にもれず、小ぶりながら見事な書院と庭がある。縁に沿って流れる水が配されている心地よい印象を与える庭の中に、背の高い大きなノウゼンカズラの木があった。夏の暑い盛りのことであり、手入れの行き届いた庭とはいえコケなど一部が焼けついている中で、そのノウゼンカズラの木は異国風の鮮やかなオレンジの花を見事に、そして調和をもって咲かせていたのが強く思い出されるのである。

主要参考文献：小野健吉著『日本庭園――空間の美の歴史』／宮元健次著『京都名庭を歩く』／『名古屋開府四〇〇年記念特別展　変革のとき　桃山図録』

中国庭園の real と actual

現代中国学部
木島　史雄

この夏、北京にある頤和園という庭園を訪ねる機会がありました。庭園といってもなかなか大きなもので周囲８キロメートルにも及ぶ園内には、巨大な人工池を中心に、湖面には堤が走り、北には仏閣を乗せたこれも人工の山を望むという仕掛けです。今回は北京動物園近くの紫竹園という庭園から船で出かけましたが、これは清朝の皇族たちが行楽の際に利用したルートでもありました。さてこの頤和園、先蹤はあるものの現在のような

西湖

頤和園